

緋の袴

岩井千枝子歌集

歌集

緋の袴

岩井千枝子著

短歌研究社

検 印
省 略

昭和五十五年八月十五日 印刷発行 ©

歌集 緋の袴 非売品

著者 岩井千枝子

郵便番号二二〇

横浜市西区南幸二丁目二〇番一七号

発行者 小野富久子

発行所 短歌研究社

郵便番号一〇二

東京都千代田区二番町八番地

電話 (二六二) 八六七八番

振替 (東京) 九二四三七五番

印刷者 林 俊 男

製本者 大沢 藤 兵 衛

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

は
じ
め
に

稚拙な第二歌集『骨なき骨箱』を、歌壇に歴史と伝統を誇る短歌研究社にお願いして、出させて頂きました。虎の威をかる小狐のように小賢しくも、烏滸がましく。

母の死と云う人生の一大事に出遭い、その悲痛のどん底を歌集にまともなと希い、一気呵成に書きなぐりました。無学な私の書く文章ゆえ、まともな難く手のつけられない原稿を持ち込み編集していただき、途中何度も書き直したり、推敲したりしたにも拘らず、厭なお顔もなさらず、予想以上に見事な出来栄えに仕上げた下さった短歌研究社に、さすがはその道の達人と頭の下る思いで感謝と敬服を表して深謝。

早速、父母と弟の遺影の前に供えて、感激の思いを新たにいたしました。

弟の戦死と、父母の断末魔を見なかつたらおそらく、私の歌集は生れなかつた。血縁を失った悲哀、それを後世の日本女性に伝えたいと思い、特に戦争の深手を負った大正の女人たちが戦後をどう生きぬいたかを、知って頂くために書きました。これは永遠に絶えない悲劇であり、書き遺したい女の歴史と、女の戦いでもあるからです。

御生前の飯岡幸吉先生から「結社の主宰は他社の歌集なんか、読みゃあしないよ」と度々承って参りましたので、歌歴も浅く名もない私の歌集など、お目もとめて頂けまいと諦めて居りましたのに、現歌壇第一線で御活躍の御高名な諸先生方から御直筆の御書状を賜り、恐縮しつつ拝読。有難く、忝けなく、感謝、感激、感涙にむせて居ります。これもひとえに、短歌研

究社の御栄光の七光り、何事も神とみ仏のおかげと感じうれし涙をこぼしました。

歌の方は、母の死後のものが多く、これは今ではとても詠めないものばかりと、思いましたけれど、雑文の方を読み返し、汗顔の至り。穴があったら這入りとうございます。

売れ残った醜老嬢の八つ当りの感、さぞや世の紳士諸公は御不快に思召したとと深謝いたします。それでなくても恐れ多くも勿体なくも、今や天皇よりも上位の首相様、並びに殿方に楯ついで悪口雑言、全世界の紳士方に刃向ったのでございますから、左右両政党、宗教団体の狂信者から、狙撃され、全身蜂の巣のように穴だらけの屍をさらすものと覚悟を決めて居りましたのに、御文賜ったりして戸惑うばかりでございます。歌人ならば、歌のみで御理解いただけますが、私の身の廻りのものは、学歴のないものが多く、勢い説明をせねば分らないと存じます。

大体、この世が女性ばかりだとしたら、退屈の余り私はどうの昔、鬼も十八、番茶も出花の娘盛りに自殺していただけます。幸に「男性」それも東大出の逸材が居て下さったから生き永らえた。私の父が、若い頃は、「喧嘩文」と異名をとったほどの喧嘩好き、その父の名に恥じず、娘の私も三度のめしより、喧嘩が大好き。私にとっての好敵手は、東大出のエリート。

わが啖阿丁々発止うけとめて斬り返し来る東大出の精銳

もしも、女性に対して「貴女は醜女オカチメンコでお多福で女人としては最低ね」ときめつけたとしたら、私は今日まで生き残れなかった。その場で袋叩きにされたあげく、寶巻にされた上、ドブ河へ投げ込まれ、今ごろは地獄の針の山の Teppen に坐り、ヒザから血を流してさめざめと泣いて居るころでしょう。

殿方が、俺は女が嫌いだから純血を守った。俺は一生独身を通した、童貞だ、純粹に生きたと自慢し誇れるでしょうか？

ぬけぬけと、生娘だ、純粹だ、男嫌いだ、親孝行だと、言えるところに女人の楽しみがあるのでございます。

第二歌集にお寄せ下さったお手紙の中で最高に嬉しくて欣喜雀躍したのは、中河幹子先生。「岩井千枝子一度で覚えました」と御声援下さった。

それにひきかえ太田青丘先生は、私のことなどすっかりお忘れて、「ああ、思い出した、思い出した。岩井鉄工所のところで、女丈夫いや、女傑で」と、やっと思い出して下さるのですから、ガツクリ。先生が私の事覚えていて下さるかしら？ と『昭和萬葉集』にも応募した。

選者諸先生の中に青丘先生の御名を拜見して、先生ならきつと一首位おとりあげ下さると思
い、先生おひとりにお縋りして応募しましたのに。「ああ、それなのに、それなのに、やはり
飯岡先生のお言葉通り、あれは御世辞だったのか？」と、もう夢も希望もなくなり、身も世も
あらぬ思いに、よよと泣き伏しました。歌にも自信がなく、先生だけはと信じて参りましたの
に、殿方は頼りにならぬと今更のように知りました。

私が鎌倉の杳々山荘へお伺いした時、折よく先生も御在宅。和服の着流しでお会い下さつ
た。先生はお座敷へお立ち遊ばされ、御手を差しのべられ、遙かに遠くをお指さされ、「ほら
海の方に白く光って見えるでしょう。あれは波頭ですよ、時々ああして見えるのですよ」との
お言葉に、私も立ち上って眺めますと、ほんとうにビルの谷間の隙にただ一すじの帯をのぼし
たように波がしらが見え、出たり消えたりしていました。私はその時歌が数首出来た。

白絹の帯のべしごと波がしら遙かに光る杳々山荘

華山の書「潮音」木彫掲げある御縁に近く濡るるあぢさる

又、先生は「あなたの事は横浜からの帰りの車の中で聞きましたよ。女社長で女傑だって

ね。然しまだまだ女っぽいから言い寄る男も多いでしょう」とおっしゃって、先生は私の売れ残りもM過剰型のじゃじゃ馬ぶりも御存知ない御様子。私がクレオパトラか楊貴妃のように世界の地図を描き変えるような絶世の美女だったら、先生は一目で私をお覚え下さった筈。けれど先生は「潮音」幾千の美女の明眸に仰がれていらっしゃるのですから、老醜女の落ちくぼんだ眸などお忘れになれるのも当然のことと、この頃ようやく諦めがつかしました。そして最後に「幼稚園卒よ頑張れ」などと馬鹿な私をおだてて、お人が悪い先生。私のように愚かな女はおだててお世辞で手なづけ、先生は、女心をつかまえていらっしゃる。ルナルが「人間は相変らず神を恐れている。神は彼等を手なづけるすべを知らないのだ」と書き残しているから先生は神様よりお偉いお方なのだ、その先生をお育てになられた四賀光子先生は、尚お偉いお方だと悟りました。

「姫由理」の碓登志雄先生、「一路」の山下喜美子先生、「垣穂」の田林義信先生、「八雲」の田吹繁子先生、それぞれの御歌誌の中で私の歌集を数ある先輩御歌集の中からお採り上げ頂きました。心から厚く深く御礼申上げます。

殿方の悪口雑言書きし手が腐りはせぬかとじつと掌を見る

目次

はじめに……………一

馬酔木

むらさきつゆ草……………一六

屈辱の日日……………二二

無残やな……………二九

今日ありて……………三六

禁じられた遊び……………四三

女の城……………四九

亜麻色の髪……………五五

孤独の飛翔……………六一

防人の妻

防人の歌……………六四

醜の御楯……………七〇

破邪の剣……………六六

濁々併せ呑む……………七二

神の裁き……………七八

酔ひ痴れて……………八四

憤怒の河……………九〇

誰故草……………九六

石笛を吹く人……………一〇二

オリオン星座……………一〇八

野ざらしの詩……………一一四

高砂の松

貴様と俺	………	五
女の戦ひ	………	六
断ちがたき絆	………	九
饒舌の坩堝	………	一〇
からたちの棘	………	一〇六

地球より重し	………	五
女社長	………	五
夕化粧	………	五
柳眉を逆立つ	………	一〇三
風の戯れ	………	一〇八

二上山

侘助の花	………	一三
母の遺言	………	一六
紅白の燈台	………	二二
大正天皇祭	………	二六
無頼の徒	………	三四
華麗なる切腹	………	三〇
冥途への旅	………	三四

もつれ髪	………	一四
木馬の嘶き	………	二八
横浜ドック	………	二四
天皇旗の下に	………	三〇
戦艦大和	………	三七
もちずりの花	………	一四

さらば秋よ……………	一四
夢のあとに……………	一五
上弦の月……………	一六
弱法師……………	一七
流木の詩……………	一八
滅びの弔鐘……………	一九
奥の細道……………	二〇
有終の美……………	二一

めぐり逢ひ……………	二二
一陣の風……………	二三
冬の蠅……………	二四
屋久杉……………	二五
四つ葉しほがま……………	二六
地球最後の日……………	二七
除夜の鐘……………	二八

かの子抄

垂乳根の母……………	一四
尼僧の恋歌……………	一五
愛の傷恨……………	一六
太郎の恋愛……………	一七
百年の恋……………	一八

魅せられて……………	一九
箱入娘……………	二〇
母子像……………	二一
人間の敵……………	二二
遺影の双眸……………	二三

歌の章……………二二七

港の空

『港の空』の歌人……………二四四
飯岡幸吉先生夫人……………二五一

飯岡幸吉先生……………二四七

緋の袴

緋の袴……………二五五
女の友情……………二六七
上品会……………二七六
台風の爪跡……………二八二
五月の鯉……………二九一

短歌研究年鑑……………二六五
日本の女傑……………二七三
めぐり逢い……………二七六
『昭和萬葉集』……………二八八

安見児の歌

安見児の歌……………二九六
嫌いな人……………三〇四

男の世界……………二九八
父性の敗走……………三〇〇

生者の行進

数学者の孤独……………三二四

白楽天の詩……………三二五

生者の行進……………三二〇

地球の苦が笑ひ……………三二一

旧人類……………三二四

傲慢無礼……………三二七

昭和元祿……………三三一

昭和の男子……………三二七

昭和一族……………三二二

高校三年生……………三二五

悲憤の涙……………三二七

明治節……………三三〇

あとがき

喧嘩一代……………三二六

あとがき……………三二五

緋
の
袴

書くために生きねばならぬ
生きるために書くべきではない

ルナアル